

## 小中一貫校 6-3制と5-4制の比較

資料13ページに記載の小中一貫校のメリット・デメリットとして記載の内容などを項目としてあげ、6-3制と5-4制における違いを表しています。

ここでは主として6年生への影響に特化した内容の記載としています。

項目	6-3制	5-4制
6年生の通学先	小学校校舎	中学校校舎
6年生の授業時間	45分間（小学校の授業時間）	50分間（中学校の授業時間に合わせる）
6年生担任の所在	小学校校舎内	中学校校舎内
6年生への専科指導	小学校籍教員による分担と一部中学校籍教員	6年生担任教員（小学校籍）による分担と一部中学校籍教員
（6年生児童に対する）専科指導の導入・小中教員の連携		
教科指導の専門性を持った教員の熟練した指導による授業の質の向上（中学校籍教員による指導）	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校と中学校の授業時間（小学校45分と中学校50分）が異なることとともに、校舎間の移動が必要となることから、中学校籍教員による6年生の専科指導のカリキュラムが確保しにくいものと考えられます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>6年生の専科指導が中学校校舎内で行われることから中学校籍教員の校舎間の移動が必要なく、比較的多数の専科指導の教科・時間の確保が可能と考えられます。</li> </ul>
複数の教員（学級担任・専科教員）によりこどもを多面的に見れる	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校籍教員による専科指導の時間数が確保しにくいことから、小学校籍教員との接点の主となると考えられます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校籍教員による専科指導の時間確保が比較的多く見込めることから、より多くの教員による多面的な評価・指導がしやすくなると考えられます。</li> <li>一方で6年生の担任がクラスにいる時間が減るため、きめ細やかな生活指導や心のケアが難しくなる可能性があると考えられます。</li> </ul>
（小学校籍）教員負担の平準化・授業準備の効率化など教員負担の軽減により、よりきめ細かい指導が可能	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校籍教員による専科指導の時間数が確保しにくいことから、小学校籍の教員の負担軽減は比較的少なくなることが見込まれます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校籍教員による専科指導の時間確保が比較的多く見込めることから、小学校籍教員の授業時間数の負担軽減につながりやすと考えられます。</li> <li>結果、小学校籍教員の空き時間を生徒への支援・指導に活かしやすくなることが考えられます。</li> <li>一方中学校籍教員の授業の負担は増えると考えられます。</li> </ul>

項目	6-3制	5-4制
小学校から中学校への円滑なステップアップ（中1ギャップの解消につながると考えられる取組）		
【学習指導面】 専科指導の導入	前項目記載のとおり	
6年生と中学校籍教員との接点	<ul style="list-style-type: none"> <li>6年生児童と中学校籍教員との接点は専科指導の授業時間が主になるものと考えられます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>6年生児童は中学校校舎で学校生活を送るため、専科指導の教員のみならず、多数の中学校籍教員と日常的に接点が見込まれます。</li> </ul>
【中学校生活に早くから慣れるための取組例】 6年生における定期テスト（中間テスト等）の実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学校生活に慣れるための定期テスト等の実施について、小学校校舎でも実施できないことはないと思われませんが、テスト実施期間中の緊張感も含めた、全体的な雰囲気は経験しにくいと考えられます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>テスト実施前の期間を含め中学校全体が定期テストの雰囲気になるため、その雰囲気を感じ、早くから慣れていくことが可能と考えられます。</li> <li>一方で、6年生から定期テストを受けることが児童の負担になることが考えられます。</li> </ul>
小中教員の連携が密になり、より深くこどものことを理解できる		
教員によるこどもの状況理解 【学習指導面、生活指導面】	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童が中学校に進学する際、小学校籍教員より中学校籍教員に対して情報の共有をするものの、どこまで詳細な共有ができるかが課題と考えられます。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>中学生になる前段階から中学校籍教員が個々の児童の状況について、直接接することにより理解を深めておきやすいことから、中学校入学直後から学習面、生活指導面双方において指導につなげやすくなると考えられます。</li> </ul>
小中学校の垣根を超えた異学年交流の拡充		
異学年交流の取り組み	6-3制、5-4制に関わらず、交流事業の取組実施次第と考えられます。	
小中教員間での打ち合わせや合同研修等の時間の確保		
教員間の連携など	<ul style="list-style-type: none"> <li>6-3制、5-4制に関わらず、小中全体として取り組む事柄について、小中の校舎が分かれていることから施設一体型の小中一貫校よりも工夫が必要と考えられます。</li> </ul>	
9年間を見通した指導計画の作成・教材の開発		
指導計画の作成・教材の開発	6-3制、5-4制に関わらず、指導計画、教材については適正配置実施までの期間に準備を進めてまいります。	

項目	6-3制	5-4制
施設面		
施設の運用	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学生は基本的に小学校の施設のみ利用 (ただし、小中一貫校となることから、運動会等学校行事において中学校の施設も利用することができると考えられます)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>6年生が授業等で使用する器具は新たに整備予定 (例: バスケットゴールなど)</li> <li>6年生の体育の授業などにおいて、日常的に中学校の広いグラウンドや体育館の使用が可能</li> <li>一方で、プール授業においては水深の関係から小学校校舎での実施が必要となるなど、校舎間移動が必要となる可能性が高いと考えられます。</li> </ul>
教室の確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後の児童数の推移において、児童数が増えるなどの場合、小学校校舎において例えば図工室等を教室に転用するなどの対応が必要となる可能性があります。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童数が増えた場合でも現在の小・中学校校舎において各学年の教室を確保可能と考えられます。</li> </ul>
その他		
<ul style="list-style-type: none"> <li>縦割り活動、委員会活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまで通り小学校校舎内で実施されるものと考えています。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動のある日は小学校校舎に通学しての活動実施を想定しています。ただし授業は中学校校舎で実施のため、校舎間の移動が生じるものと考えています。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>クラブ活動(小学校)、部活動(中学校)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校校舎でのクラブ活動実施とともに、希望により中学校の部活動にも参加いただけるようにすることを想定しています。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校校舎でクラブ活動を実施する場合、校舎間の移動が生じるものと考えています。</li> <li>希望により中学校の部活動にも参加いただけるようにすることを想定しています。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>小学校最高学年としての経験</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>6年生が小学校校舎における最高学年として、リーダーの経験を積んでいただけるものと考えています。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>縦割り活動や委員会活動、クラブ活動など小学校校舎での活動実施を想定しているものの、日ごろから小学校校舎にいないため、最上級生としての経験が6-3制と同様に経験できない可能性が考えられます。</li> <li>ただし、その場合でも小中連携事業の中で上級生としての取組・活動の実施を取り入れることは考えられます。</li> </ul>